# メコン・デルタの多民族社会

## Tra Vinh 省 Hoa Thuan 村の史的研究

髙田　洋子*

# Multiethnic Society in the Mekong Delta

## —A Case Study of Hoa Thuan Village—

Yoko TAKADA

According to one agronomist familiar with the Mekong Delta, the region is divided into several geographical parts from the point of view of rice agriculture. Among them, the "coastal c omplex" is a unique area, composed of sand ridges, coastal flats, inter-ridges, and mangroves. This paper focuses on the features of one particular village in the coastal complex division in order to gain a better understanding of rural society in the Mekong Delta.

Hoa Thuan village is in the east of Tra Vinh city, which is characterized by a multiethnic society. Khmer (Cambodian) people, have occupied the sand ridges from an earlier time than the Kinh (Vietnamese) people, who only began living along these small rivers in the early nineteenth century, and Hoa (Overseas Chinese) have mixed intermittently with both

＊たかだ・ようこ：敬愛大学国際学部助教授　ベトナム近代史

Associate Professor of Developing Country Studies, Faculty of International Studies, Keiai University; modern history of Vietnam.

groups.

First, intensive field research involved observing natural conditions of agriculture and land use in the coastal complex in order to determine the process of settlement and how the land was cleared. Second, based on accounts of Buddhist monks from temples in local hamlets, the writer describes the process of village development. It was found that some Khmer temples were built in the late fourteenth century. The changes in the population shares of each ethnic group and landholding from the French colonial period to today are analyzed through the results of interviews with village elders. Using also related colonial documents held in the National Archives, the writer presents a history of Hoa Thuan, giving attention to the historical relations in the ethnic groups, and finally points out how structural social problems were caused by French colonialism and ethnocentric nationalism.

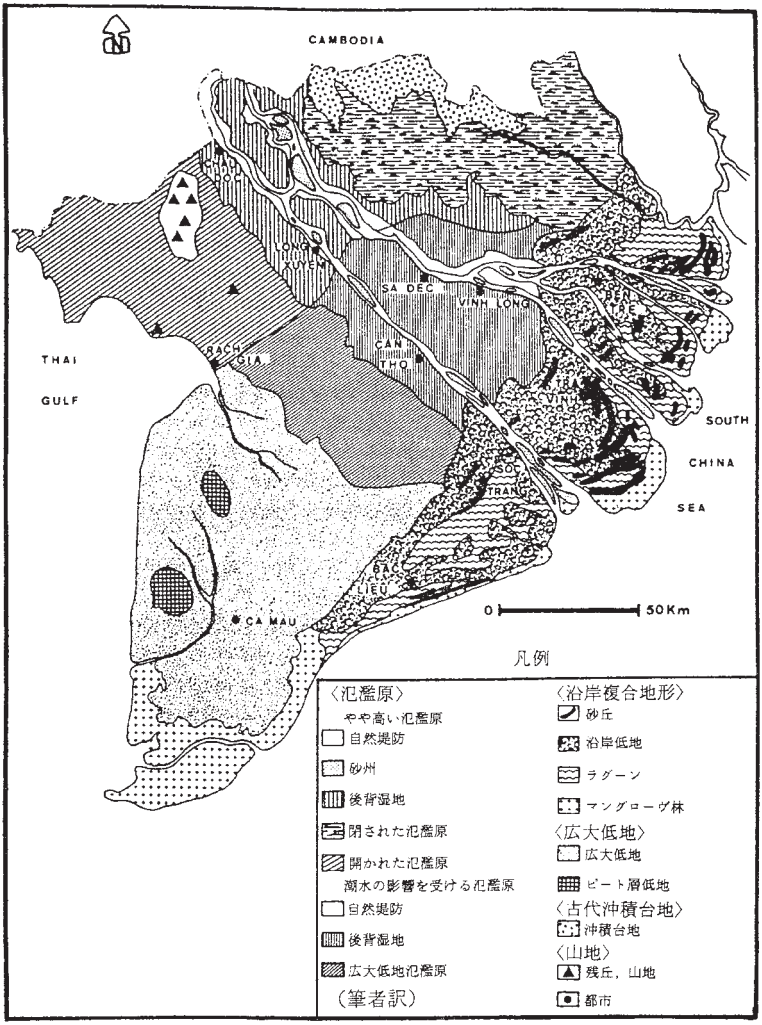
## はじめに

インドシナ半島を貫流するメコン川は、これまで流域諸国における広域水資源開発の対象として国際的な関心を集めてきた。その下流部メコン・デルタは、近未来における世界有数の食糧供給地として有望視されている。しかし、そうした潜在力をよりよく開発するためには、基盤となる農村社会の理解が不可欠である。

メコン・デルタ開発史における重要な画期は、インドシナがフランスの植民地支配を被った時代にさかのぼる。筆者は、その時代のデルタ新田開発に関する論考をこれまでにいくつか発表したことがある(1)。またここ数年来デルタ各地を踏査する機会を得て、その地形的差異や農村諸社会の異なる特徴に注目するようになった(2)。

本稿で取り上げたベトナム領チャヴィン省は、メコン・デルタの中央に浮かぶ大きな中州の臨海部に位置する（図1）。同省の古い地名である Tra Vang（茶聞）は、クメール（カンボジア）語の Prac Prabang「仏陀の聖なる池」に由来する(3)。その名の通り、省都の郊外にデルタ下流部には珍し

図1　メコン・デルタ地形区分




（出所）　Nguyen Huu Chiem, “Geo-Pedological Study of the Mekong Delta,”『東南アジア研究』（京大東南アジア研究センター）31巻2号，1993年，161ページから作成.

いバライ（baray）が現存する。それは、かつてメコン流域にアンコール帝国を築いたクメール民族（カンボジア人）末裔の足跡である。チャヴィンには、先住クメール族、ベトナム・キン族、そして南中国からの移住者

図2　チャヴィン省7県と調査村

の子孫が共存する[4]。本稿で筆者は、同省砂丘上村落社会の現地調査を通して、これまでほとんど内外でも明らかにされていないメコン・デルタ多民族社会の一断面を具体的に考察する。

調査村には、チャヴィン市近郊のホアトゥアン村（1995年当時人口1万7,000）を選んだ（図2参照）。ホアトゥアン村は東部をコチエン川に面し、北部をコチエン川から引かれたチャヴィン水路およびチャヴィン市と接している。同村のクメールとキンの両民族人口はほぼ同数であり、南北10km・面積2,700haの細長い行政区内に分布している。同村は、97年から南北2村（北の新ホアトゥアン村と南の新ホアロイ村）に分かれたが、本稿で用いる「ホアトゥアン」は、旧村の領域を指すことをあらかじめお断りしておく。

現地調査は、1994年と95年の2回の予備調査を経て、96年8月20日から8月31日の雨季、および98年3月21日から同年3月26日の乾季に、計4回行った[5]。それらの実態調査に基づいて、以下ではまずⅠで村の地形や土壌、土地利用など農業の自然的諸条件を観察し、次にⅡで集落の立地、民族構成、宗教・共同体建造物の調査を重ね合わせて、村の開拓過程を考察

する。さらにⅢにおいて、当該地域に関する公文書等の第１次史料[6]と農民のインタビュー調査から得られたデータを利用して、開拓の社会過程を再構成する。当該地域の農業社会が地域の自然環境とどのように適合して成立したか、また多民族社会の歴史過程とその構造的諸問題を明らかにしたい。

## Ⅰ　自然的条件から見た農業開拓の過程

### （１）　メコン・デルタ海岸複合地形と稲作の近代化

メコン川の本流ティエンザン川は、ヴィンロン付近でいくつもの支流に分かれる。そのうち一番西のコチエン川とメコンのもう１つの分流ハウザン川に挟まれた大きな砂州が、メコン・デルタ中央部を占める。その砂州は上流側にヴィンロン省、下流にチャヴィン省を含む。チャヴィン省は、チベットの渓谷から4,000km を流れ下った大河メコンが南シナ海に注ぐ最下流部にある。そこは、砂丘と海岸平野、砂丘列に挟まれた低地そして沿岸部のマングローブ樹林帯から構成される典型的な海岸複合地形である（図１参照）。

この地形を最も特徴づける砂丘列は、とりわけ同省南部において、海岸線と平行に緩やかな円弧を描いて何層も発達している。砂丘は標高２mから４m 以内、また幅500m－２km、長さわずか５m から40km におよぶものまで、様々な規模で存在する。砂丘列の間には、砂丘の斜面を下って海抜１m 以内の低地が存在し、窪地や自然小河川沿いの湿地部分が含まれる。下流沿岸部は、乾季（11月から４月）になれば潮汐が浸入する。海岸平野部の塩分を含む土壌問題は、降雨量の少なさと並んで、同省の農業発展の大きな桎梏と見なされてきた[7]。

表１によれば、同省のなかで Vinh Long 省に接する北部２県（Cang Long、Cau Ke）の籾生産量が多いことがわかる。両県とも乾季の潮水浸入をほとんど受けないために土壌の塩分濃度は低く、また Vinh Long 省内の自然

表1　チャヴィン省7県の米生産状況（1990年）　（単位 ha・トン）

| 県名 | 年生産 | | 冬春稲 | | 夏秋稲 | | 雨季稲 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 面積 | 生産量 | 面積 | 収量 | 面積 | 収量 | 面積 | 収量 |
| Cang Long | 32,527 | 113,606 | 9,524 | 42,713 | 14,361 | 40,088 | 8,642 | 30,805 |
| Cau Ke | 27,905 | 107,022 | 5,450 | 25,506 | 14,048 | 52,744 | 8,407 | 28,772 |
| Tieu Can | 19,327 | 65,612 | 4,435 | 18,828 | 7,281 | 21,644 | 7,611 | 25,140 |
| Chau Thanh | 22,253 | 60,750 | 638 | 2,066 | 4,782 | 9,867 | 16,833 | 48,817 |
| Tra Cu | 19,556 | 56,781 | 890 | 3,133 | 2,649 | 8,289 | 16,017 | 45,359 |
| Cau Ngang | 15,246 | 41,818 | － | － | 2,171 | 6,390 | 13,075 | 35,428 |
| Duyen Hai | 3,679 | 9,420 | － | － | 171 | 522 | 3,508 | 8,898 |

（出典）*Vu Nong Nghiep-Tong Cuc Thong Ke So Lieu Thong Ke Nong Nghiep 35 Nam*（*1956－1990*), 1991, Hanoi, p. 586.

河川からハウザン川の真水を容易に取り込むことができる。Cang Long、Cau Ke、Tieu Can 諸県は冬春米の農地面積・生産量が多い。これらは乾季の灌漑農業が行われていることを示している。そのうえ夏秋米（短期収穫型の高収量稲）の栽培も行われる。天水に依存する栽培期間が長期に及ぶ伝統的雨季稲の栽培面積は、南部の Chau Thanh、Tra Cu、Cau Ngang などの諸県より少ない。このように北部諸県は、省内における水田耕作の先進地域である。

これに対して同省の南は沿岸部に近づくほど、籾の生産量は少ない。しかもほとんどが伝統的な雨季稲栽培が中心である。Cau Ngang、Tra Cu の砂丘列間の低地では、雨季になると高畦の、貯水池のように満々と水をはった水田をよく見る。農民は土壌の塩分濃度を下げるために、降雨によって水田に十分な水を供給した後に、遅い田植えを行う。刈り取りは、乾季に入り塩水の土壌表面への上昇が始まる前に行われる[(8)]。ホアトゥアン村を含む Chau Thanh 県も1990年代初頭まで水田の灌漑面積は少なく、雨季稲を中心に栽培していた。村の灌漑水路の建設が80年代後半から始まり、コメの二期作は順次達成されつつある。

チャヴィン省政府は、真水を供給する運河建設や潮水の浸入をせき止める水門建設を、農業近代化の方策として推進している。塩分濃度の高い土壌の改良および乾季の灌漑農業促進を目的に、ベトナム戦争後の1977年前後と80年代半ばから、ヴィンロン省から真水を引く幹線水路の工事に力を

入れている。地方政府による主要運河の建設が終わると、県や村の指揮の下で、農民たちは自分の農地へ真水を引くための第２次・第３次水路を掘って、運河網を拡大している[9]。

### （２） ホアトゥアン村の地形と土壌

調査村ホアトゥアンは村の北をコチエン川（対岸はベンチェ省）、東をフンミイ村、南はフックハオ村、南西はダロック村、そしてチャヴィン水路を越えて北西部にはロンズック村と接している[10]。

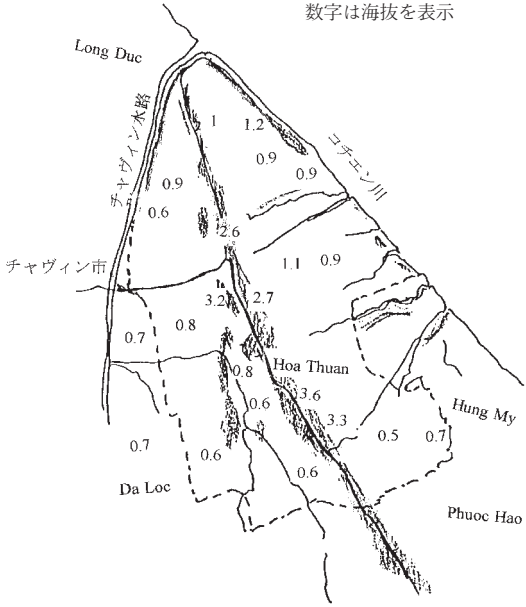
村の中央には背骨のように行政区全体を貫いて走る砂丘が存在する。比較的標高の高い砂丘は２ｍ前後から最高3.6m 程度で、北にゆくほどそれは低く、幅も狭くなってしまう。南に向かって幅は広くなり、さらに村の南境にゆくにつれ再び狭くなる。村の中央部では主たる砂丘の西側に第２次砂丘とも言うべきやや標高の低い砂丘が沿っている（図３）。

砂丘の東西両側は緩やかに傾斜して低地へつづく。低地の標高はどこも１ｍ以下である。砂丘を中心に東と西でそれぞれの高低差を比較してみよう。まず砂丘の東部は西部よりやや標高は高い。東部の低地は、村の北から中央部にかけて海抜0.9m ほどであり、低地としては最も標高がある。このような地形によってコチエン川からの浸水が避けられる一方で、土地自体はさらに低位の土地と比べて水不足に陥りやすい欠点がある。南に下るにつれ標高は0.8m から少しずつ低くなって0.6m 程度となる。他方、砂丘の西側でも、南にいくほど0.6m から0.7m ほどの低い土地が多い。

砂丘の東側の低地には小さな自然の川がいくつもあり、コチエン川に注ぐ。砂丘の西側にも、チャヴィン水路に注ぐ自然小水路がいくつかある。こうした小川の周辺は土地が低いために、雨季には雨水があふれて洪水状態が続き、乾季にはコチエン川やチャヴィン水路をさかのぼる潮水の浸入により土壌が塩分で汚染される恐れがある。低地の窪地にたまった水が酸性土壌の問題を引き起こす。また土中の塩分は、コチエン川に近い村の北部ほど高い。北部の砂丘では地下水に塩分を含む。

地形の断面模式図（地形モデル）を次に掲げる（図４参照）。砂丘はフラ

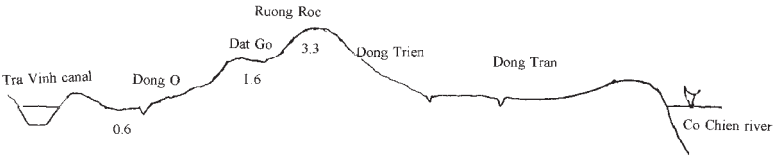
図3　ホアトゥアン村の地形（砂丘・低地・自然小河川）




ンス期の史料では Giong と総称され、もっぱらクメール人の村落が立地する高みと記された。ホアトゥアン村では、砂丘上の最も高い部分の農地を Ruong Roc、2 次砂丘上の土地を Dat Go と呼んでいる。砂丘両側の傾斜面を Dong Trien、また砂丘東部の低地を Dong Tran、西部の低地を Dong O と言う。

砂丘上とその斜面では、雨季の天水に依存した稲作と、地下水を利用する乾季の畑作が昔から営まれている。主たる砂丘と 2 次砂丘の間は稲作と畑作の好条件を備えている。また低地では稲作がもっぱら行われた。小川を含まない低地であれば、標高のより低い土地の方が雨水を集めて水田を作りやすい。降雨量の少ないチャヴィンにおいては、低地の水田立地の条件は、小川流域を含まず、かつ低い土地ほど有利である。つまり、村の南部ほど低地の標高が低くなり、水田の立地条件は優位にある。これに対して、北部の東側に位置する低地水田は水不足と土壌の高塩分濃度によって

図4　地形断面模式図と呼称




（注）　数字は海抜を表示.

農業環境が劣ると考えられる。

砂丘上の土地は、水田や畑などの農地の他屋敷地を含む集落や小道、県道、宗教・公共施設に利用され、残りは、竹林等に覆われている。砂丘上の農地は、人口の増加やチャヴィン市街地の周辺部拡大によって縮小傾向にある。その一方で村の中心から南の地域では、Ruong Roc や Dat Go は雨季作の水田もしくは畑地、乾季には畑作地としてもっぱら利用されている。

砂丘の斜面は、畑や低地水田の苗代用地および水田に、低地部はもっぱら水田として利用される。一方低地のうち、前述のように村北部の Dong Tran の土壌は、乾季には潮水の影響を強く受けるために塩分度が高い。村の南部の低地（Dong Tran/Dong O とも）の方が水田耕作に有利である。但し南部の自然河川の周辺低地は、最近に至るまで水田化は遅れた。

現在では低地に水利設備（ポンプ利用の排水・灌漑用水路）が建設されて二期作が達成される地区も現れ、砂丘や斜面の水田よりも低地の水田の方が高収量と見なされるようになってきた。また新しい水路沿いには少しずつ集落の形成が始まり、盛り土の高みに畑作および果樹（バナナやココヤシなど）栽培が試みられている。

以上の観察から、同地域の農業開拓の過程を筆者は次のように考える。まず、大昔は沿岸部であった砂丘は、現在の沿岸部がそうであるように、汽水地域の植生であるマングローヴに覆われていた。しかし砂丘地域が陸地化するにつれてマングローヴは次第に消滅し、砂丘とその斜面は竹林に覆われた。竹は砂丘の地下水に根を下ろして繁茂できる環境適合植物だったと考えられる。砂丘と砂丘の間の低地は塩分土壌と乾季の水不足によっ

て、窪地に限られた草類のみ生育した。自然水路沿いには塩水に強いニッパヤシ類の植物が繁茂していただろう。

開拓の原風景を以上のように想定すると、ホアトゥアンの農業開拓は、用水の確保が容易な地形、土壌の塩分濃度が低いこと、自然排水の容易さなどの諸条件を満たす砂丘上と斜面がまず農地として開発され、その後に低地の開発に進んだという時間的流れが仮定できる。また村の南部ほど農業の土壌条件・水環境が良いことから、古い開拓は村の南が北部や中央部よりは先に進行した。さらに砂丘の北にゆくほど、また低地では川や水路および窪地に近づくほどに農業生産は容易ではなく、そのような土地の開田時期は遅かったと考えられる。

## Ⅱ　集落の形成過程

### （1）　行政組織

現在のメコン・デルタの地方行政は、Tinh（省）の下に Huyen（県）が置かれ、その下に最末端行政組織として の Xa（村落）がある。しかし Xa は複数の集落 Ap（邑）を束ねる、農村統治の便宜的組織である。ホアトゥアンにおいては、Ap こそが実態を伴う地縁社会の農村単位である。これには後述するような歴史背景がある。Ap は、現在はさらに30戸前後の隣組 To に分けられる。

To の起源は、大野の聞き取りによれば、1980年代にある。農業の集団化を指向した時代の落とし子のようだ。To は平均30戸前後の世帯（120人－150人程度）から成り、社会主義体制の確立を目指した農村生産隊の一単位であった。To には To Truong（組長）がいて、まとめ役を担わされている。To Truong は 3 級水路の掘削や補修に Xa や Huyen の機関の指示を受けて農民を召集したり、農民銀行から融資を希望する者に書類を書いたり、税の軽減を求める農民を世話して Ap 長に掛け合ったりする[11]。

自治集団である Ap の代表者 Ap Truong（集落長）は成員の税簿を毎年

修正管理し、県政府の出す委任証書を有した収税係が納税額を徴収する。従来は毎月4万ドンの報酬を受けたが、1996年から年一括払いで70万ドンが支給されることとなった。Apで集められた税はXaに提出され、各Apの納税金はまとめてXaから県政府に提出される[12]。

Apの自治を具体的に担うのはAp Truong（副Ap長）、Ap Doil、Cong Anの3―4人である。Ap TruongはXaの行政幹部に選ばれた者を、住民が建前上は選挙する方式で選出される。彼の仕事はAp内の安寧と住民の把握の他、稲作の問題点（病虫害など）をいち早くとらえてXaに連絡し、省政府の勧農センターの指導を仰いだりする。また就学年齢に達する予定の子供の家庭を訪ねて就学を指導する。Apの例会を月1回開催する。XaはApに決められた年間スケジュールを指導する[13]。

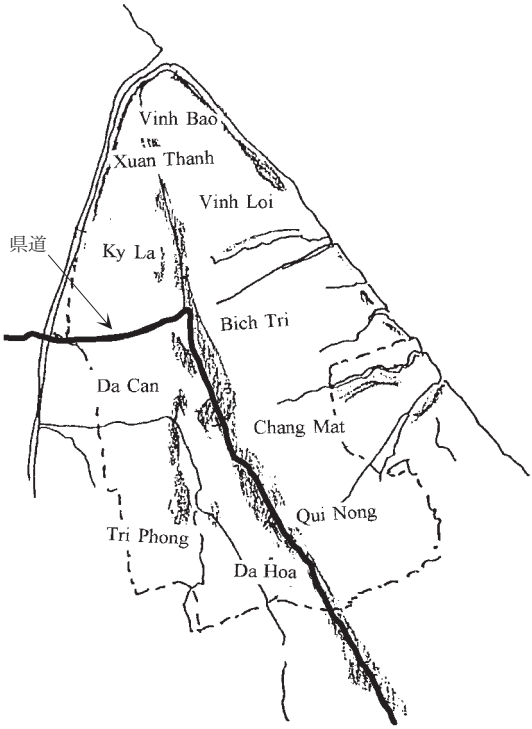
個々の農民にとって最も関心の高い税負担額（農地税、宅地税、水利税など）は、以上のように農民の状況から判断してApのレヴェルでほぼ決められる。しかし徴税額の公式の認可は県政府が決定する。ApとHuyenの関係は、Xaを飛び越えて結ばれている。

### （2） 各集落の人口と農地規模の細分化

旧ホアトゥアン村は10の集落から構成された（図5参照）。チャヴィン市から東に伸びた県道の北側から順に、チャヴィン水路がコチエン川に注ぐ最北端の集落Vinh Bao、その南にXuan Thanh集落、さらにその南にKy La集落、コチエン川沿いにVinh Loi集落の4集落が位置する。県道が南下する地点からは西側にDa Can集落、県道を挟んで東側にBich Tri集落、Da Canの南にTri Phong集落、その東側県道沿いにChang Mat集落、さらにその南にQui Nong集落と続き、村最南端の集落Da Hoaに至る。

村の総人口は1万7,180（1995年10月現在）、世帯総数は3,280戸である（表2参照）。集落の平均人口はほぼ1,500人前後と見ることができるが、村の南部に位置するChang MatとQui Nongの両集落は1集落で平均的集落の2倍の人口規模である。また表2から算出される1家族の人数は村全体

図５　ホアトゥアン村の10集落の位置




の平均では、5.2人。集落別では Bich Tri と Qui Nong 両集落が最大で、5.8人となった。最小は Tri Phong 集落の4.3人である。どちらも、夫婦と子供（２から３人）の核家族が普通であることがうかがわれる。

次に各部落の土地利用の様子を表３から見ることができる。村の総面積2,710ha のうち、農地は全体の約90％（2,409ha）を占めている。宅地は2.6％、公有地（公共用地や道路・水路など）が4.1％、その他（宗教用地や私的林野等）が4.4％を占める。農地面積が最も大きいのは、先の Qui Nong 集落の522ha である。

最小規模は Vinh Bao 集落の32ha である。Vin Bao の総世帯237戸のうち農家は95戸、漁業を営む世帯が39戸、集落の半数以上は非農業世帯である。

表２　ホアトゥアン村集落別人口（1995年10月）

| 集落名（Ap） | 人口 | 世帯数 |
|---|---|---|
| Vinh Bao | 1,331（7.7%） | 237（7.2%） |
| Xuan Thanh | 1,603（9.3%） | 344（10.5%） |
| Ky La | 1,690（9.8%） | 347（10.6%） |
| Vinh Loi | 1,259（7.3%） | 225（6.9%） |
| Bich Tri | 1,229（7.2%） | 212（6.5%） |
| Da Can | 1,406（8.2%） | 264（8.0%） |
| Tri Phong | 1,558（9.1%） | 359（10.9%） |
| Chang Mat | 2,610（15.2%） | 492（15.0%） |
| Qui Nong | 2,956（17.2%） | 511（15.6%） |
| Da Hoa | 1,538（9.0%） | 289（8.8%） |
| 合計 | 17,180（100%） | 3,280（100%） |

（出所）　ホアトゥアン村役場提供資料.

表３　ホアトゥアン村の集落別土地利用（1995年10月現在）　（単位 ha）

| Ap | 総面積 | 農地面積 | 宅地 | 公有地 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| Vinh Bao | 45.99 | 32.72（1.4%） | 5.18 | 2.81 | 5.28 |
| Xuan Thanh | 258.22 | 238.86（9.9%） | 7.84 | 7.04 | 4.48 |
| Ky La | 170.68 | 154.76（6.4%） | 9.25 | 6.56 | 0.11 |
| Vinh Loi | 362.10 | 264.79（11.0%） | 6.15 | 3.23 | 87.93 |
| Bich Tri | 196.49 | 184.83（7.7%） | 6.02 | 4.74 | 0.90 |
| Da Can | 148.21 | 134.24（5.6%） | 5.60 | 8.37 | |
| Tri Phong | 331.94 | 302.96（12.6%） | 7.43 | 20.5 | 1.05 |
| Chang Mat | 276.16 | 255.66（10.6%） | 8.84 | 10.71 | 0.95 |
| Qui Nong | 568.30 | 522.41（21.7%） | 10.68 | 21.43 | 13.78 |
| Da Hoa | 352.10 | 317.84（13.2%） | 5.28 | 25.66 | 3.32 |
| 合計 | 2,710.19 | 2,409.07（100%） | 72.27 | 111.05 | 117.80 |

（出所）　ホアトゥアン村役場提供.

表２と表３から、１戸あたりの平均農地面積を単純に算出すると１戸あたり平均0.73ha となる。メコン・デルタ村落の平均値と比べて非常に小規模である。ホアトゥアン村で村の平均値を上回る集落は、Vinh Loi、Qui Nong、Da Hoa、Bich Tri、Tri Phong の５集落で、平均を下回る部落は Ky La、Da Can、Chang Mat および Xuan Thanh である（表４参照）。

ホアトゥアン村役場の提供資料によれば、土地使用権の保有規模は表５の通りである。全体の約45%は、農地0.1ha から１ha の規模の範囲にある。１ha を越える保有規模者は全体の17.3%であるのに対して、0.1ha 以下は

表４　各集落の１戸あたり平均農地面積

| | | | |
|---|---|---|---|
| Vinh Loi | 1.173ha | Xuan Thanh | 0.691ha |
| Da Hoa | 1.097ha | Chang Mat | 0.518ha |
| Qui Nong | 1.022ha | Da Can | 0.508ha |
| Bich Tri | 0.868ha | Ky La | 0.444ha |
| Tri Phong | 0.841ha | Vinh Bao | 0.135ha |

（出所）　表２，表３より筆者算出.

表５　ホアトゥアン村土地使用規模別割合（1995年）

| 使用規模 | 戸数 | 割合 |
|---|---|---|
| 3ha以上 | 22 | 0.7% |
| 2haから3ha | 99 | 3.0% |
| 1haから2ha | 446 | 13.6% |
| 0.1haから1ha | 1,446 | 44.7% |
| 0.1ha以下 | 605 | 18.4% |
| 土地なし | 642 | 19.6% |
| 計 | 3,260 | 100% |

（注）　表２の農家総数3,280戸に対して20戸少ない．その理由は不明.

（出所）　ホアトゥアン村役場提供.

38%である。１ha 以下の規模の農家は82.7%に達している[14]。フランス時代の土地所有平均規模と比較すれば、現在のそれらは格段に小規模化した。後に触れるように、仏領期のチャヴィンのこの地域の土地保有規模は、かなりの階層差を特徴としていた[15]。大土地所有者の存在は、一方でその土地を耕作する小作人もしくは土地なし層の存在を想定させる。このような土地所有の不平等を示す農民階層分化は、20世紀初頭に大いに進んだと筆者は考える。農民の聞き取り調査から、大地主の土地集積は20世紀の上四半期まで見られ、その後フランス植民地支配を後退させた革命と抗仏戦争のなかで、土地所有規模は加速度的に減少していったことがわかる。

人口圧による土地の細分化は収益率を低下させる。現在のところ肥料の投入や二期作化による増産が、土地細分化の結果引き起こされる農業問題を緩和するのに役立っている。とはいえ、このまま人口増加が続くなら将来には深刻な農業不安を生じることは必至である。

### （3） 民族分布

ホアトゥアン村の民族構成は、キン族が多数派とはいえ、人口の46.7%をクメール族が占める。この人口比はチャヴィン省全村落の平均より17%も高い。各集落ごとの民族別人口の状況は表6に示される。

クメール族の方がキン族より多い集落は、村の中央部から南に位置するBich Tri、Da Can、Tri Phong、Qui Nong、Da Hoaの5集落である。南部集落のQui Nongはホアトゥアン村で最大規模のクメール人社会であり、また最南端のDa Hoaでは住民の96%がクメール族で占められている。南部では例外的に、Chang Mat集落が、キン族の多数派（67%）集落である。

これに対して村の北部は、キン族が優勢である。最北端のVinh BaoとVinh Loi両集落にはクメール人は全く住んでいない。Xuan Thanhも99%がキン族である。

中国系はわずか56人、人口比0.3%にすぎない。ただし、聞き取り調査の過程で中国人を祖先に持つキン族の例は多く（特にChang Mat集落）、そのようなキン族は村のなかでは相対的に裕福で集落の自治に携わる場合が多い。また土地所有規模から見た民族別社会階層では、最大土地保有規模の農家は、祖先に中国人を含む例が多い。一方、土地を全く持たない農民のうちでクメール系がしめる割合は高い。

一般にチャヴィン省西部のハウザン川沿いの地域には、クメール人が多数派である村は多い。そのような社会においては、少数派のベトナム人もクメール語で暮らしている。また中国人とクメール人の混血が多い[16]。ホアトゥアン村の60歳以上の農民を対象とした筆者の聞き取り調査においては、20世紀初頭に単身で渡越した華僑が、チャヴィンの町で出会ったベトナム人女性と結婚して女性の出身村に住み着いた例が多かった。興味深いことに、そのような華僑ははじめに生まれた子供を、男女を問わず、できるだけ純粋な中国人の血筋を持つ若者と結婚させていた。また中国人を父に持つ長男がベトナム人女性と結婚した場合でも、生まれた長子をできるだけ純粋な中国人の子弟と結婚させる傾向が見られた。中国人の血が混

表 6　Ap別民族状況（1995年10月）

| Ap | Kinh（ベト族） | | Khome（クメール） | | Hoa（華人） | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 戸数 | 人口 | 戸数 | 人口 | 戸数 | 人口 |
| Vinh Bao | 237 | 1,331 | — | — | | |
| Xuan Thanh | 338 | 1,581 | 6 | 22 | 4 | 16 |
| Ky La | 228 | 1,159 | 115 | 515 | | |
| Vinh Loi | 225 | 1,259 | — | — | | |
| Bich Tri | 49 | 322 | 163 | 907 | | |
| Da Can | 135 | 680 | 129 | 726 | | |
| Tri Phong | 48 | 203 | 305 | 1,315 | 6 | 40 |
| Chang Mat | 331 | 1,757 | 161 | 853 | | |
| Qui Nong | 137 | 743 | 374 | 2,213 | | |
| Da Hoa | 44 | 69 | 245 | 1,469 | | |
| 合計<br>（全人口に占める割合） | 1,772 | 9,104<br>（53.0%） | 1,498 | 8,020<br>（46.7%） | 10 | 56<br>（0.3%） |

（出所）　ホアトゥアン村役場提供資料.

じっていることは、彼らの誇りのようである[17]。

村の世帯のほとんどは稲作を主とする農業を生業としたが、Vinh Baoは専業漁師もしくは半農半漁が多い。村の北部のキン族世帯には、様々な小規模家内工業（チャヴィンの町を市場とした地酒、米粉の麺、漁業用の網作り等）を営む事例もある。

これらに対して先住民族であるクメール人は昔から砂丘の上に住み、地下水を利用した。ホアトゥアンは昔から飲料用の清水をチャヴィンの町に供給する「水の村」と言われていたらしい。日常生活に不可欠な水が欠乏する乾季にあっても、ここでは井戸から真水を汲むことができた。また農業用水は、砂丘上の畑のそばに掘られた円錐形の大きな穴に湧き出る地下水を利用した。一般に、デルタはモンスーン気候によって雨季と乾季では自然状況が一変してしまう。今世紀の初頭まで、デルタのほとんどの新開地では、１年の半分を占める乾季において、人々は農業を営むことはできなかった。掘削された水路沿いの土地をのぞくと、カラカラにひび割れた広大な大地で人々は居住どころか飲み水の確保すら難しかった。しかし砂丘は乾季のデルタのオアシスのように緑に包まれ、人々に生産活動を許したのであろう。乾季の最終時期、すなわち１年で最もメコン・デルタの土

や空気が乾ききる3月下旬にホアトゥアンを訪れたとき、筆者は砂丘上の畑に農民が冠水する様を観察した。深さ3m以上、直径5mほどの大きな逆円錐形の穴がRuong RocやDong Trienに掘られていた。その内側の傾斜面に作られた階段を降りて、人々は穴の底にたまった水を両肩のジョウロに汲んでは、地表の畑に灌水していた。それはかなりの重労働である。商品生産が盛んになってきた最近では、こうした収益性の高い畑作物の生産が盛んである。

チャヴィン市場に近いホアトゥアンでは、畑でとれた野菜を町で行商することはフランス時代から日常的に頻繁に行われていた。キン族は、砂丘に農地を取得しても水を掘り当てることが困難であったと言うが、現在でも地下水の豊富なQui NongやDa Canのクメール人は畑作を熱心に続けている。

両方の民族が共存する集落でのクメール族とキン族の棲み分けは、集落によって異なる。Ky Laにおいては集落を2分する道路によって東はキンが多く、西にはクメールが住む。Bich Triでは、砂丘上にはクメール族、コチエン川に注ぐ小川沿いにはキン族がまとまって住んでいる。クメール族が多い村の南部で例外的にキン族が多数派であるChang Mat集落は、コチエン川に注ぐ河川が東側から砂丘近くに入り込んでいる。この河川沿いにキン族が入植し、砂丘上に達したと考えられる。

### （4） 宗教・公共建造物

現時点におけるこの村の民族別分布状況は、キン族がコチエン川方面からコチエン川の支流をさかのぼってチャヴィン内に進出してきた入植の歴史的経路を、いまだに明瞭に表している。調査で確認した7ヵ所の村の宗教・歴史建造物は、その建造時期から、両民族の社会形成過程を類推させる。ホアトゥアン地域に現存する建物は、クメール族の上座部仏教寺院が4つ、キン族および中国系の大乗仏教寺院が3つ、キン族の村の政事を行うディン（亭）が1つである。これらの建設年代について、老人、僧侶、役人などの聞き取りから次のような結果が得られた。

まずクメール寺院はKy La、Da Can、Tri Phong、Qui Nongの4ヵ所にある。そのうち最も古いのは、Qui Nong寺である。この寺は、フランス時代にはQui Nong、Da Hoa、その南のPhuoc Haoの北半分（旧Da Hoa）の各集落のクメール人にとって、精神的中心かつ社会的中心であった[18]。1904年に出版されたフランス期のチャヴィン省モノグラフによれば、Qui Nong村のクメール寺はBang Da寺と呼ばれ、その南のKim Cau部落にあるBau Mang寺（同省の最高僧侶が居住する）とともに、チャヴィン最古の寺である[19]。ところが聞き取りでは、今から800年以上前の建立だとする説と400－500年前とする2説があって再調査が必要となった。この寺はシャムから送られたという仏像の台座を所蔵しており、それには仏歴2137年（16世紀末）の年号が刻まれていた。この寺の周辺スロック（Sroc：クメール・クロムの伝統的村落単位）は、植民地時代はたくさんのプム（phum：クメール族の集落単位）に分かれていた[20]。

次にTri Phongのクメール寺院Chua Kong Chey（Wat O）の成立年は、600年以上前の1361年と僧侶は答えている。この寺も、他の寺と同様に仏領期に修築されている。Chang MatとTri Phongのクメール族が参拝する[21]。

またKy La寺院（Wat Koky, Wat Selacholathi）は、1666年にBen Tre（コチエン川対岸）から逃げてきたクメールの人々によって建てられたという。フランス時代のKy Laは、コーキール集落（Phum Kho Kiyr）と呼ばれていた。

Da Canのクメール寺院Wat KhoSach Candal（もしくはWat Chumprasach）は、1872年に周囲の住民の申請によってカンボジアの王とフランス政庁の許しを得て建立された[22]。Bich TriとDa Canのクメール人が参拝する。Da CanはPhum Khosach Candal（砂の真ん中の集落の意）、またBich TriはPhumボット・トゥレイ（パーリ語起源の王族用語で子女の意）とクメール語では呼ばれた[23]。

一方、Xuan Thanhには村道沿いのコチエン川側にキン族のDinhがある。正面の入り口の上に城皇境、永順社（Vinh Thuong Xa）、永長村（Vinh

Truong Thon）と銘打ってある。亭のなかには、最近外国に脱出した人々からの送金リストが掲げてあり、送金のおかげで祭りが盛大に開かれるようになったという。また Ky La のクメール寺院の前の村道を挟んで向かい側には、キン族の Giac Quan 寺がある。村の長老の話では、この寺の土地ははじめクメール寺院のものであったが、1916年頃にここを訪れたベトナム人僧侶が、周辺に住むキン族のために寺を建立した。すぐ近くには宮処主の観音像が立ち、また寺中には Chau Doc に本山のある聖母寺に似た像がまつられ、外にはクメールの土地神 Ong Ta Mieu の石重ねが置かれている。異民族が隣り合わせに住むここでは、それも当たり前の風景なのだろうか。

Tri Phong の中国人が1911年に私費を投じて建立した廟（亭も兼ねる）には、関帝がまつられている。またその近くに1940年代に再建された尼寺 Lien Quan 寺がある。Chang Mat 集落の最西部に位置する。

これらの建築物（住民生活に今でも活用されている）から想像すると、この地における入植および社会形成の過程は、まずクメール人によって砂丘の南の Qui Nong 周辺をコアにおそくとも16世紀末には見られたこと（インドシナにおける13世紀以降の上座部仏教伝来初期の時代の可能性も残している）、その後農村社会は Tri Phong 周辺に拡大し、さらに17世紀後半になると、コチエン川の対岸のベンチェからクメール人が到来した。こうしたクメール人農業社会が砂丘上でかなりの歳月を経た後に（その期間は600年から700年間）、ようやくキン族はコチエン川沿いからこれに注ぐ支流や砂丘の北端に住み着いて19世紀前半に集落を形成し始めた。しかもフランス時代のクメール社会の日常は、上座部仏教寺院とサンガを中心に、「伝統的」行政空間であった Sroc（村）-Phum（集落）のつながりを保持したまま存続していたと考えられる。

# Ⅲ　ホアトゥアン村の歴史過程

## （1）　グエン朝期の村落

そもそもキン族がクメール族のプレイノコール（旧サイゴン）を制圧し、南部地方進出の拠点としたのは17世紀末である。キン族は、その後メコン・デルタに向かって開拓を本格化させた。約１世紀にわたり、ベトナム人の自由な開拓の日々が続いた。中国から渡来した明の遺臣も開拓の列に加わった。

やがて19世紀初頭に、現在のベトナム領とほぼ同じ版図をもった政権（グエン王朝）が越南国を樹立した。このグエン朝第２代のミンマン帝のときに初めて、デルタの先住クメール族の村にベトナム式の支配体制が強要された。19世紀半ばの史料から、クメールの集落は漢字の地名に直されて、キン族ベトナムの統治機構に組み込まれていることを確認できる。従来のクメール族の Phum（集落）および Sroc（村）が、ベトナム式の Thon や Xa に編成される過程は明らかにされていない。前述のように、住民意識の中では Sroc-Phum の空間認識はフランス時代を通して存続していた可能性が、ホアトゥアンの事例から推察される。

文献によれば、ミンマン時代の急激なベトナムによる政治支配は、クメール世界との摩擦を生んだ。1830年代のチャヴィンにおける両者の戦いは、当初はクメール族の勝利に終わった[24]。これに対して、コチエン川から進軍したグエン朝キン族は、ホアトゥアンの Ky La 地域に集結した[25]。Ky La は両者の激しい戦闘の地となったようだ。

フランスがデルタの支配権を奪取した1868年頃の史料によれば、ホアトゥアン村の砂丘地域は、グエン王朝楽化府（Lac Hoa Phu）茶栄県（Tra Vinh Huyen）であった。現在のチャヴィン省は、当時はコチエン川側の茶栄県とハウザン川側の遵義県（Tuan Ngai Huyen）に分かれていた。茶栄県は、５つの総（Tong）に分かれ、102の村（Xa もしくは Thon）を含んだ。この

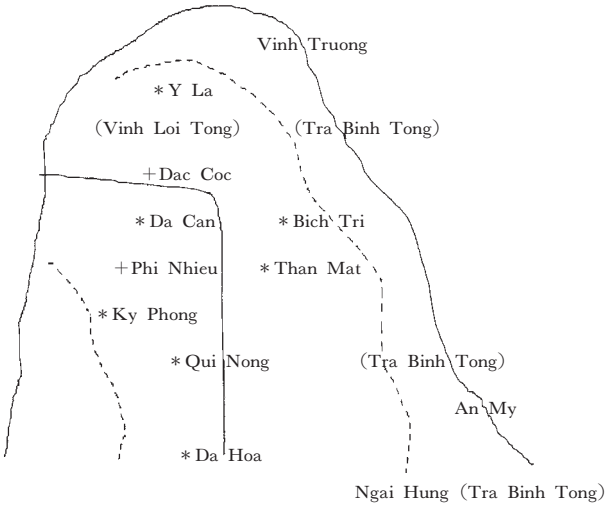
表 7　1868年栄利総（Vinh Loi Tong）の村（Xa, thon）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 平津村 | Binh Tan thon | 梅香村 | Mai Huong thon |
| ＊碧池社 | Bich Tri xa | 檬樹村 | Mong Thu thon |
| 錦堆村 | Cam Doi thon | ＋肥堯村 | Phi Nhieu thon |
| ＊多芹村 | Da Can thon | ＊帰農社 | Qui Nong xa |
| ＋多穀村 | Da Coc thon | 山榔村 | Son Lang thon |
| ＊多夭社 | Da Hoa xa | ＊慎密村 | Than Mat thon |
| 和睦村 | Hoa Muc thon | 水澄社 | Thuy Trung xa |
| 金溝村 | Kim Cau thon | 擇梁村 | Trach Luong thon（筆者修正） |
| ＊奇豊村 | Ky Phong thon | 長溝社 | Truong Cau xa |
| 楽義村 | Lac Ngai thon | ＊綺羅村 | Y La thon |

（注）＊は現ホアトゥアン地域で，現在の Ap の地名とほぼ同一の村．xa と thon の区別が何を意味するか不明．表内のベトナム語名・アルファベット順は Dau 氏による．

（出所）Nguyen Dinh Dau, *Nghien Cuu Dia Ba Trieu Nguyen, Vinh Long*, TPHCM 1994, pp. 168–170.

図 6　19世紀前半の村落の位置図（ホアトゥアン地域）




102 村のうち、現ホアトゥアン村の集落名と類似のものは、栄利総に含まれる Bich Tri、Da Can、Da Hoa、Ky Phong（Tri Phong ?）、Qui Nong、Than Mat（Chang Mat ?）、Y La（Ky La？）の 7 つである（表 7 の＊印参照）。

栄利総のこれら20村のそれぞれについて記された東西南北の位置関係を考慮して図中に表す[26] と、当該地域は図 6 のようになる。この配置図に

示したように、ホアトゥアン地域には表7のDa Coc村およびPhi Nhieu村の2村（＋印）も含まれた。

また現在のVinh BaoとVinh LoiもしくはXuan Thanhの場所は、栄利総とは別の茶平総（Tra Binh Tong）永長村（Vinh Truong Thon）に含まれた。現在のXuan Thanh集落にある亭（ディン）に、Vinh Truong Thonの文字が残されていたことを想起されたい。19世紀前半に表記されたコチエン川右岸流域の茶平総は、北のチャヴィン水路河口部を含み、キン族の優勢な地域であった。

地簿に記された各村の農地面積は、表8に示した。おおよその水田面積は、この地域で約1,753mau（858ha）、畑地は約428mau（210ha）と推計される。もちろん当時の村の領域と現在の各集落のそれは必ずしも一致しない。またフランス植民地期の間にも行政区画の変更があった。しかし当時、この地域の水田と畑作地の合計は、1,000ha以上であったことは確認される。それは現在のそれの約2分の1程度に相当する。

### （2） フランス植民地期の農業開発と階層分化

フランス海軍はヴィンロンを1867年に支配下に置いて、そこを拠点にチャヴィン・ベンチェ・サデックを1つの監察区とした。その後フランス政庁は1881年以降にようやく文民統治体制への転換を果たし、メコン・デルタを20省に分けて行政機構を整備した。チャヴィン省政府が組織され、82年から任期2年のフランス人行政官が省都に派遣された。この時代に作られたフランス省政府のオフィスは、チャヴィン市中心部の官庁通りに現存する[27]。1881年5月にはグエン朝時代の法が全廃され、フランス法の適用が謳われた[28]。

行政面では、楽化府茶栄県（Tra Vinh Huyen）栄利総（Vinh Loi Tong）は、1876年には栄利上総（Vinh Loi Thuong）（12村）と栄利下総（Vinh Loi Ha）（14村）に分けられた[29]。当時の人口増加がうかがわれる。また1903年に編纂された同省のモノグラフには、栄利上郡Vinh Loi Thuong（Canton）のなかに、グエン朝期のKy La（奇羅）、Bich Tri（璧池）、Da Can

表8　グエン朝期ホアトゥアン地域の農地面積推定

（1mau＝4,894.4m²）

| Xa・Thon名 | 公田 | 畑地（公土） |
|---|---|---|
| （Vinh Loi Tong） | | |
| Qui Nong | 447mau | 60mau |
| Y La | 67 | 29 |
| Ky Phong | 85 | 6 |
| Da Can | 174 | 30 |
| Da Coc | 102 | 24 |
| Phi Nhieu | 37 | 13 |
| Da Hoa | 326 | 118 |
| Than Mat | 33 | 7 |
| Bich Tri | 76 | 68 |
| （Tra Binh Tong） | | |
| Vinh Truong | ＋406 | ＋73 |
| 計 | 1,753mau<br>（約858ha） | 428mau<br>（約210ha） |

（注）Vinh Loi 総には公田と公土のみ．私田と私土はない（Dau, *op. cit.*, p. 347）. Qui Nong から Bich Tri は，*ibid.*, pp. 348–355. Vinh Truong は，*ibid.*, p. 333. Tra Binh 総（Vinh Truong thon）の田には公田と私田，畑地に公土と私土の別あり．私田と私土の面積は不明.

（多勤）、Chang Mat（慎密）、Tri Phong（池豊）、Qui Nong（帰農）、Da Hoa（多和）の村々が、アルファベットと漢字表記ですべて現れる。Vinh Truong（永長）村も茶平郡 Tra Binh（Canton）に含まれたままである[30]。つまり20世紀初頭の植民地末端行政機構は、基本的にはグエン朝時代のそれをほぼ継承していた。また、フランス期の行政村落に Vinh Bao、Vinh Loi、Xuan Thanh の名はまだない。Vinh Truong 村を中心としたホアトゥアン北部地域の 3 集落への再編は、1955年以降と推定できる。

フランス政庁は、19世紀末までチャヴィン省内の運河網やハウザン川に抜ける主要運河の延長に取り組んだ。ホアトゥアン地域の北西部に接するチャヴィン水路は1876年に天然の川を拡張した 5 kmの水路で、1884年には南の Ba Thieu 運河と、さらに1897年に Rach Lop 運河と繋いでハウザン川に抜ける主要運河の 1 つになった[31]。交通路の発達が世紀末から20世紀初頭におけるチャヴィン省内の処女地の開拓に役立ったことは、事実

であろう。チャヴィン省全体の水田面積は、1888年から1898年の10年間に年平均約800ha の増加、さらに1898年から1908年のそれは1,900ha/年となり、世紀転換期にかなりのスピードで拡大された。しかし次の1908年から30年には、その拡大ペースは早くも失速した[32]。チャヴィンは輸出米の生産拡大のための地形的条件が、広大なフロンティアを有したデルタ西部と比べて劣っていた[33]。

土地の払い下げに関する仏領期の資料によれば、ホアトゥアン周辺地域では文民統治への転換とともに、未登記地の払い下げと開発申請が1880年代にすでにいくつか要求されている[34]。それはキン族によるコチェン川沿いの土地の申請で、その後のチャヴィン省の水路開設に伴って急増する払い下げ要求の先駆けと見ることができる。

複数の長老とのインタビューによれば、仏領期の末にはこの地域の可耕地はほとんど開拓されて、農地は現在と変わらない状況に達していたという。その上、土地所有を基軸とした村民の階層分化は相当に進んでいたようである。ホアトゥアンの在村大地主は、Ky La 村や Qui Nong 村、Da Hoa 村のクメール族であったし、キン族ではホアトゥアン村の南のフックハオ村に住む一族が有名だった。さらにチャヴィン省都に住む中国人がホアトゥアンのクメール人集落の大地主であった例もある。また中規模の地主には、チャヴィンに住むフランス人、インド人もいたようである。フランス人、インド人の土地はホアトゥアンの北部に多かったのに対して、クメール族の在村地主の土地は、村外、省外の広域に及んでいた。彼らは、チャヴィン省の他の村やときにはソクチャン省のクメール族富裕層と姻戚関係を結んで、メコン・デルタの大土地所有階層の一角を形成していた。その子弟は、プノンペンやパリに留学した。Ky La の大地主一族は村政の長老（Huong Ca）や村長（Xa Truong）をつとめ、フランス植民地地方政府の信任も厚かった[35]。

またフランス植民地政府は、クメール人を治安部隊に編成し、村々の巡視に付き添わせた。ベトナム人の年輩女性は、筆者にその巡視の情景を語りながらクメール人は恐かったと述べた。教育の面でも、フランス時代に

はフランコ・アナミット（仏越）およびフランコ・クメール（フランス・カンボジア）学校のそれぞれがチャヴィンの町にあり、裕福な家の子弟が通っていた。初等教育は両民族別々に行われた。インタビューしたほとんどのクメール男性が、青少年期に出家して村の寺院で修行した経験を有していた。またフランス植民地政府は寺院内でのクメール教育を積極的に奨励した[36]。

インドシナ戦争中に革命運動に身を投じた農民は、とりわけ現在のXuan Thanh や Vinh Loi また Chang Mat に住むキン族のかつての小作農や農業労働者だった。インタビューした老人のなかには、小作料を減免しない不在地主を殺害したり、インドシナ戦争末期の1954年以降に逃げ出したフランス人やインド人の土地を占拠して分配した人々もいた。クメール族はそのような激動の時に、フランス側につくか、もしくは立場を積極的には表明しない場合が多かった。その結果、結局は当時の体制側に取り込まれて悲劇の運命をたどった人々も多い。

### （3） ベトナム共和国期の村落再編と社会的変動

フランス撤退後のメコン・デルタは、ベトナム共和国政府と潜伏したベトミン勢力が覇権を争う潜在的な危険地帯となった。共和国政府は、そのなかでフランス時代の南部150村落を56行政村に再編した。ホアトゥアンでの行政機構上の 2 つの重要な変化は次の通りである。第 1 に、旧村落の合併によって新しいホアトゥアン村が誕生する過程で、旧来の Xa は自治集落 Ap や Xom に行政的格下げを被った[37]。第 2 に、新生ホアトゥアン Xa の行政区は、コチエン川沿いの旧 Tra Binh 県から切り離したキン族の旧 Vinh Truong 村を南に続く砂丘上のクメール世界に接合し、また旧 Vinh Loi Thuong 県の南に含まれたクメール族の Da Hoa 村を 2 分して、半分をホアトゥアン村の最南部へ、残りをフックハオ村の最北部に組み込んだ[38]。

つまり19世紀後半にフランス植民地政府がグエン朝時代から引き継いだ古い行政区域は切断されて、「独立国家」の行政単位に再編された。ただ

し新しい行政村 Xa が誕生しても、旧来の Xa は地縁的共同性を保持したまま、Ap（自治集落）として現在でも実質上機能している。

行政上の変化のみならず、1955年以降はゴー・ディン・ジエム独裁体制下でベトナム同化主義の嵐が吹き荒れた[39]。フランス植民地体制に荷担したクメール人の一部は、ジエムの反共政府に利用されてベトナム革命運動派と対峙したが、大部分はジエムのベトナム同化主義を強要された。当時クメール由来の地名はベトナム風に置き換えられた[40]。Qui Nong、Tri Phong、Ky La などのクメール集落名は、消し去られた。クメールの富裕層は、仏領期にも増して子弟をプノンペンに留学させた。一般の人々も親戚を頼ってカンボジアへ移住した例が多い。しかし彼らのほとんどが75年以降のポル・ポト時代に発生した動乱に巻き込まれて消息不明となった。ベトナム戦争終了後から始まったベトナム・カンボジア国境戦争への若者の兵士としての調達、70年代末のカンボジア侵攻にいたる時期に、ホアトゥアン地域のクメール人社会が被った緊張は想像するに余りある。

もちろん、キン族内の体制・反体制の確執も、1955年以降の複雑な社会対立の一要素であった。ベトナム戦争中は村の砂丘の東と西で、勢力は基本的に 2 分されていた。コチエン川沿いは革命側、西は政府軍の支配下にあった。かつて Da Can には戦略村もつくられた。戦禍を逃れようと人々は砂丘の道路沿いに仮の家を建てて住んだ。長引く戦争の社会的混乱を背景に、両エスニック・グループともに、土地なし農民の村からの流出が続いた。こうした激動の時代であっても、60年代の一時的平和と市場経済の活発化のなかで蓄財し土地を集積した人、70年代はじめのグエン・ヴァン・チュウ政権下の農地改革で土地を無償で取得した農民も多い。

ベトナム戦争が終結した1975年以後に、ボートピープルあるいは合法的に同村から出国した人々も多い[41]。統一後、70年代末からこの村でも農業の集団化がしばらくは試みられた。Xuan Thanh 地区出身の革命派農民が、生産隊への再編と集団化について Ap ごとに指導した。しかしこの試みは80年代はじめには放棄された。集団化の過程で自分の土地を失った人、その一方で土地を取得することができた人もいる。

一方、Vinh Loi 集落では、戦争の荒れ地や所有権の放棄地に、村外からの入植者を多く受け入れた。Vinh Loi 地区にこれを機に入植したのはキン族であり、ホアトゥアンにおけるキン族の人口比率を増大させた。すでに述べたように、Vinh Loi 周辺の土地は塩分土壌と水不足によって、農業条件が最も劣る地域である。現在はその低地に水路の建設が進められ、コメの二期作化をめざす努力が続けられている。

フランス撤退後の農村変動は大変に複雑な要素を含んでいる。1955年から75年、あるいは75年以降に農民諸階層はどのような変化を被ったのか、さらに詳しい調査が必要である。ここでは、植民地時代に形成された諸階層が解体し、キン族主導の社会変動が続いていることを確認するだけにとどめたい。

## むすびにかえて

本稿はデルタの特色ある地形区分上の村を研究事例とし、その個別史を描き出すことで、メコン・デルタ農村社会の一断面を明らかにすることを目的とした。チャヴィンの当該調査村は、1997年にバサック川以西のカントー省で調査した運河社会に続いて筆者のメコン・デルタ農村第 2 の研究事例である。

典型的な海岸複合地形の砂丘上に位置するホアトゥアン村では、農業に適した自然条件の有り様によって、開拓はまず砂質の土壌と豊富な地下水を有する砂丘上から、砂丘斜面へ、続いて塩分土壌の問題を克服できた低地へ進んだと考えられる。先住民族クメール社会は、ホアトゥアンで最も農業と居住条件が良い砂丘上に存在した。キン族は19世紀初頭にこの地域に進出した。全体として19世紀半ばからの約150年間に農地は 2 倍以上に開墾されたと考えられる。農業条件の劣る砂丘列の間の低地が積極的に開墾された。この場合、植民地期の水田開発の進展のなかで、西部デルタで見られたようなクメール族の離散現象はホアトゥアンでは起きなかった。キン族が村の多数派になるのは、植民地期の終了以後と思われる。

ホアトゥアンでは、1930年代には域内のフロンティアはほぼ消滅した。フランス植民地期において両民族社会はともに、少数者による土地集積と、零細・土地なし農民の増大による大地主・小作関係を発展させた。とりわけクメールの在村大地主は、植民地地方政府への協力およびデルタの他のクメール社会富裕層との姻戚関係を強めた。またフランス植民地政府の民族政策はエスニック・グループの分離を基本とし、クメール族を植民地権力の傭兵に利用した。デルタの砂丘上農業地域におけるキン族の進出が緩慢なペースにとどまった要因として、クメール社会の農業立地の優位性と階層化の進展、およびフランス支配の影響が大きかったと考えられる。

フランス植民地時代は、砂丘上のクメール社会およびコチエン川沿いに入植したキン族社会双方の行政的配置は、前植民地期のままに継承された。これに対して、1955年に誕生するベトナム共和国政府は、ホアトゥアン地域のベトナム（キン族）化を目指した行政再編を実施する。独立以降のベトナム民族主義と、主としてキン族内の社会改革をめぐる覇権闘争によって引き起こされる社会混乱が、砂丘上のクメール社会に与えた衝撃は大きかった。クメール社会は以前にも増してカンボジアとの結び付きを強めることとなった。ホアトゥアンのクメール社会が、寺とサンガを中心とするクメールの社会的・精神的紐帯をどのように保ったかはなお不明な点が多い。今後は、農村社会内部の社会調査が現地政府によって許可されることを願いたい。

一方、フランス植民地時代の末期から反植民地主義、革命運動に身を投じたのは、農業の自然条件に恵まれず、不在地主の土地を耕作していたホアトゥアン村北部のキン族の人々であった。インドシナ戦争の終了後に不在地主の土地を積極的に再分配したのは彼らであり、ベトナム戦争終了後に荒廃地の新経済区に入植したのもほとんどキン族の人々である。

ホアトゥアン村の研究は、メコン・デルタ農村の多民族社会に、新たな光を当てるものである。従来の内外における研究、および文書館に保存された１次史料からでは知り得ない事実が、現地調査によって少なからず発見できた。チャヴィンの歴史は、メコン・デルタの開拓を担った諸民族の

複雑な関係史を体現すると同時に、インドシナ近現代史における重要なカンボジア・ベトナム関係の底辺の諸問題に通じている。筆者は、メコン・デルタ農村の多民族間関係の史的研究をここ数年間は継続して行うつもりである。

（注）

(1)　髙田洋子「20世紀初頭のメコン・デルタにおける国有地払下げと水田開発」『東南アジア研究』（京大東南アジア研究センター）22巻3号、1984年、同「植民地コーチシナにおける国有地払い下げと水田開発――19世紀末までの土地政策を中心に」『国際学研究』（津田塾大学国際関係学科紀要）No. 10、1984年、同「メコンデルタの開発」、池端雪浦編『変わる東南アジア史像』、山川出版社、1994年。現地調査後の論考として、髙田洋子「メコン河流域の開発と環境に関する一考察――コーラート高原とメコン・デルタの事例を中心に」『環境情報研究』（千葉敬愛短期大学環境情報研究所紀要）No. 2、1994年、同「歴史的視点よりみるメコンデルタの農業開拓」『国際教養学論集』（千葉敬愛短期大学紀要）No. 5、1995年、同「フランス植民地期メコン・デルタ西部の開拓――Can Tho 省 Thoi Lai 村の事例研究」『敬愛大学国際研究』（敬愛大学国際学部紀要）No. 1、1998年。

(2)　1993年夏のメコン・デルタ踏査は、文部省科研国際学術調査「近世ベトナムの土地所有・農業と農村社会」（研究代表者：桃木至朗）研究組織者の一員としてのもの。94年8月には、京都大学東南アジア研究センターの海田教授、カントー大学農学部の Nguyen Huu Chiem 氏、チャヴィン省農業局のスタッフとともに、チャヴィン省内を視察。海岸低地の典型的高畦水田（Cau Ngang 県）、同県砂丘上のクメール寺院、Tra Cu 市の大規模水利開発工事現場、ハウザン川近辺のクメール文化遺跡および周辺農家を訪問。翌95年8月は、デルタの開拓最前線地域の踏査の折に、チャヴィン省を再訪（1995年―1997年度文部省科研費補助金国際学術研究「メコンデルタ農業開拓の史的研究」研究代表者：髙田洋子）。クメール族が非常に多い同省西部のTra Cu 県ハムザン村カサン集落、ベトナム人が多数派を占める東部沿岸 Cau Ngang 県のヒエップホア村ソックソアイ集落、そして両民族が拮抗するチャウタイン県ホアトゥアン村チホン部落の3地域を訪問。その報告は髙田洋子「チャヴィン省のクメール・クロム」『国際教養学論集』（千葉敬愛短期大学紀要）No. 6、1996年。

(3)　La Societe des Etudes Indochinoise, *Geographie, Physique, Economique et Historique de la Cochinchine, IXe fascicule, Monographie de la Province de Tra-Vinh*, Saigon, 1903, p. 5.

(4)　チャヴィン省の総人口約95万のうち、クメール族は28.8%を占める（1994年）。この省内の民族比率は、同じくクメール族の多いと言われるメコン・デルタのチャウドックやソクチャン両省のそれよりわずかだが高い。フランス植民地期において、チャヴィン省のクメール族人口動向は他のデルタ諸地域とは異なる趨勢をもっていた。一般にはメコン・デルタのクメール族は、20世紀以降に本格化するデルタ西部の開発のなかで、移住してきたキン族に押されてほとんどの地域で少数派となった。ところが、当時のチャヴィン省ではクメール人口は増大を続け、人口比も5割前後を維持してキン族のそれと拮抗していた（*Bulletin administratif de la Cochinchine*, Saigon, 各年の省別人口統計を参照）。ベトナム社会主義共和国の少数民族としてのクメール族に関する概説は、Dang Nghiem Van, and Chu Thai son-Luu Hung, *Ethnic Minorities in Vietnam*, Hanoi, 1993, pp. 32–38.

(5)　1996年雨季調査のチームは日本人研究者7名（大学院生3名を含む）、ベトナム人研究者1名、ベトナム語通訳、クメール語通訳各1名、総勢10名。研究者はそれぞれ歴史学（ベトナム史・カンボジア史）、農業水利学、自然地理学、土壌・作物学の専門家。現地の受け入

れ機関はカントー大学。98年3月の調査チームは日本人4名、ベトナム人通訳1名同行。

(6) フランス植民地政府の公文書は南仏エクサンプロヴァンスの海外植民地公文書センター（Le Centre des archives d' Outre- mer：以下CAOMと略）、およびベトナムホーチミン市国家公文書センター2（Trung Tam Luu Tru Quoc GiaⅡ：以下TTLTと略）に所蔵。文書館での調査は1996年8月2日―8月16日（於ホーチミン）と1997年3月15日―3月31日（於エクサンプロヴァンス）に実施した。収集資料一覧は髙田洋子編『メコン通信』No. 2、No. 3（1996年度文部省科研費補助金調査報告書1-2）、1997年3月に掲載。

(7) メコン・デルタ農村に関して現地調査を基になされた先行研究には、アメリカ人文化人類学者Gerald Hickyの著作（*Village in Vietnam*, Yale University Press, 1964）がある。彼の調査村は、ホーチミン市と接するロンアン省西ヴァムコ川流域のキン族100%の村Khanh Hau。その著作は、とりわけ同村の家族や親族集団に関する考察を中心としている。アメリカの南ベトナム介入の時代に行われたいくつかの村落調査報告は、当時のメコン・デルタ農村を分析する格好の素材となる。しかしながらその内容には村落社会の歴史的観点をほとんど含まない。

(8) 髙田、前掲「メコンデルタの開発」、246-247ページ。

(9) チャヴィン省政府水利局でのヒヤリング（1995年8月）。

(10) 髙田、前掲「チャヴィン省のクメール・クロム」、4ページの図2および8ページの図3参照。

(11) 大野美紀子「Tra Vinh省Chau Thanh県Hoa Thuan村調査報告」『メコン通信』No. 2、23-48ページ。

(12) 同上。

(13) 同上。

(14) ベトナムでは現在土地は国有が原則。その一方で成年に達した農民に土地の使用権が認められている。規模の上限は地方により異なる。使用権には、売買、賃貸、質入れ、相続等が認められている。権利は多年生作物が生育する土地では30年、1年生のそれは20年。実質的な私有権であると農民は受け取っている。ホアトゥアンの集落ごとに土地の保有規模の状況は次の通り。Da Hoa：土地なし農家は全体の26%。1ha以下の保有者は、50%。複数の地片を集めた最大規模の保有は5ha。Qui Nong：土地なし層は15%。最大規模は4ha。西側低地は1haあたり308ドルの高値（1996年現在）。Tri Phong：土地なし層は24%。最大規模3haなど（1996年度聞き取り調査より）。

(15) Yves Henry, *Economie Agricole de l'Indochine*, Hanoi, pp.230-231.

(16) 髙田、前掲「チャヴィン省のクメール・クロム」、18-19ページ。

(17) 髙田洋子「1996年度夏チャヴィン省チャウタン県ホアトゥアン村調査報告」『メコン通信』No. 2、69-100ページ参照。

(18) 今村宣勝「フィールドノート・メモ」『メコン通信』No. 2、126-174ページ参照。

(19) *Monographie de la Province de Tra-Vinh, op.cit.*, p. 35.

(20) 今村、前掲「フィールドノート・メモ」、139ページ。

(21) 野口博史「1996年8月チャヴィン調査聞き取り結果」『メコン通信』No. 2、108-109ページ。

(22) 髙田洋子『メコン通信』No. 5（1997年度調査報告書）、1998年7月参照。

(23) 今村、前掲「フィールドノート・メモ」、173ページ。

(24) La Societe des Etudes Indo-Chinoise, *Geographie Phisique, Economique et Historique de la Cochinchine, Fascicule, Monographie de la Province de Soc-Trang*, Saigon, 1904, p. 65.

(25) Tinh Uy Uy Ban Nhan Dan Tinh Tra Vinh, *Lich Su Tinh Tra Vinh Tap Mot*（*1732－1945*）,（『チャヴィンの歴史　第1巻（1732-1945）』）, Tra Vinh, 1995, pp. 67-69, Tran Thanh Phuong, *Cuu Long Dia Chi*（『クーロン省地誌』）, Vinh Long, 1989, pp. 120, 133.

(26)　各村の位置は、グエン朝文書では、漢越文字表記で東西南北に接する村名を示した。これをもとに、各村の位置を比定できる。資料は Nguyen Dinh Dau, *Nhien Cuu Dia Ba, Trieu Nguyen*, *Vinh Long*（『グエン朝期地簿の研究ヴィンロン編』), TP. Ho Chi Minh, 1994, p. 88. 1876年の資料によれば、Tra Vinh 地区の民族別人口は、ベトナム人 2 万5,700人、カンボジア人 3 万2,000人、中国人1,360人である（*Ibid*., pp. 92–93)。

(27)　TTLT 2 [SL. M. 76, 6268].

(28)　*Lich Su Tinh Tra Vinh, op.cit*., p. 78.

(29)　Dau, *op.cit*., pp. 168–169, p. 92, p. 101.

(30)　*Monographie de la Province de Tra-Vinh, op.cit*., pp. 20–21.　フランス時代のコーチシナにおけるクメール人問題に関する論文として、L. Mallaret, “La minorite cambodgienne de Cochinechine,” *Bulletin de Societe d'Etude de l'Indochine*, 21e, 1946, pp. 19–34.

(31)　*Ibid*., p. 80. また *Monographie de la Province de Tra-Vinh*, pp. 8–9.　ホアトゥアン村の南に接するフックハオ（Phuoc Hao）地区の Bang Da 川を Co Chien 川に繋いだのは、ミンマン帝時代のベトナム王朝政府である（*Ibid*., p. 8)。

(32)　髙田、前掲「メコンデルタの開発」、248ページの表 3 。

(33)　同上、248ページ。

(34)　Bich Tri 村のコチエン川に臨む土地が、Vo Van San に20ha 6are 払い下げられた（1880年）（TTLT. 2 [SL. M. 74, 6271])。同年の史料に Tran van Thu が旧 Vinh Truong 村に 4 地片計84haの借り入れを行った（TTLT. 2 [SL. M. 7, 6273])。いずれもコチエン川に注ぐ Tom 川と Sang 川の間の土地。

(35)　髙田洋子「Tra Vinh 省 Chau Thanh 県 Hoa Thuan & Hoa Loi 村乾季農業調査」『メコン通信』No. 5、63–82ページ。土地所有の問題は別稿にて詳論を展開したい。なおこの Ky La の大地主は後のカンボジアの民族主義者ソン・ゴック・タンの父。タンの生家には現在兄の娘が住み、当時村長を務めたその父や、土地を買い集めた大地主の祖父の思い出を語った。ちなみにホアトゥアンの隣村には、カンボジアの元ポル・ポト派要人イエン・サリの生家がある。同派の理論的指導者とされたキュー・サムファンもチャヴィン省出身であった。カンボジアの現代史に登場するこれらクメール人エリートの民族的アイデンティティの形成に、クメール・クロムの歴史・社会的背景があるとすれば興味深い。

(36)　ホアトゥアンには、上座部仏教（Theravada）寺院の敷地内にフランス時代につくられた別棟の小教室の建物がいくつか残っている。

(37)　ハウザン川以西の Thoi Lai 村では、19世紀末に成立した行政村が現在まで、1 行政村として存続し続けた。

(38)　髙田洋子「メコンデルタ砂丘上村落の農業開拓：チャヴィン省ホアトゥアン村の事例研究(1)」『メコン通信』No. 3 および髙田、前掲『メコン通信』No. 5所収。

(39)　新生ベトナム共和国のゴー・ディン・ジエム政権は、第一義的にはベトナム華僑の経済支配をうち砕くことを目指して、華僑に対するベトナム国籍取得を強いた。チョロンやサイゴンの華僑は大量に台湾、香港その他へ出国した。ベトナム在住華僑には多くの職業制限を法的に設けて、中国人の排斥をはかった。クメール人への影響は、現地調査の過程で初めて実態に触れることができた。

(40)　ベトナム風地名への転換は、当時はメコン・デルタの至る所で強制された。チャヴィンは、フーヴィエンとなった。メコン・デルタで一般に見られた集落を表す Ap が、紅河デルタの農村で一般的に使われる Xom に置き換えられたところも多い。

(41)　同村で1975年から96年までの間に出国をした村人の数は、405人である。行き先は、アメリカ256人、カンボジア68人、オーストラリア57人、カナダ42人、タイ25人、日本20人、ドイツ20人、フランス11人など。カンボジアやタイへの出国は Qui Nong や Da Hoa 諸集落からのクメール人である。国内移住者は、ソンベへ49人、ヴンタオへ29人（村役場での聞き取り)。